
OH、遭難！

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OH、遭難！

【Nコード】

N8192M

【作者名】

HERO

【あらすじ】

牙を剥く人食い熊！ 襲い掛かる密猟者！ 仲間の裏切り！
そして、世界の終焉……！！ 逆境で光を見出せ！！

(前書き)

なんぞ？

これなんぞ？

僕は山本。登山サークルに所属している大学一年生。

僕達のサークルは現在、山で遭難しています。

何故かって？ 全員一緒に崖から落ちたからです。そして全員程よく骨折をしました。

長距離の移動ができないため、僕達は運よく近くにあった洞窟で救助を待っています。

洞窟でエロトークをしていると一人の先輩が僕に言いました。

「おい山本、お前一番怪我が軽いんだから何か食い物探してこいよ」

僕は恐らく頭蓋骨にヒビが入っていると思うのですが、先輩の命令には逆らえません。それにメンバーの中にいる紅一点——神崎さんに、良い所を見せたいという想いもあります。

なんとしてもこの任務を成功させ、先輩方に一目置かれる存在となり、神崎さんにも好意を持たれたい。

僕は張り切って食料を探しにいきました。

——が、自然はそう甘くなく、食べられそうなものはなかなか見つけられません。

そのかわり、

「君はまさか、遭難中の大学生か…！？」

搜索隊に見つけてもらうことはできました。

すぐに先輩達に知らせなくては。

洞窟に戻った僕は驚愕しました。神崎さんがみんなに押さえ込まれているではありませんか。

きつと先輩方はエロトークによるムラムラを解消すべく、神崎さ

んを犯すつもりなのでしょう。“どうせ助からない、だから最後に良い想いをしたい”、そういう弱さが出てしまったのかもしれない。

「おい山本、お前も…」

「お断りします」

それは絶対にマズイですよ先輩方。

「みなさん、ちょっとそのままストップをお願いします」

僕は再び洞窟の外に出ました。

「この洞窟に全員いるんだね？」と、捜索隊の方々。

「ええ、ですが救助はしばし待っていただきたいのです」

あんな状況で先輩達が助かることを知ったら、かなり気まずい空気になるでしょう（助からないことを前提にあんなことをしてるんですから）。

いや、空気とかそんなことは問題ではありません。助かったあと、ほぼ間違いなく先輩達は神崎さんに訴えられ、僕の愛する登山サークルは消滅する。それが問題なのです。

僕は一つの策を講じて、もう一度洞窟へ入っていきました。

「はい、“ドッキリ”終了です」

洞窟へ戻った僕はみんなにこう言いました。当然、先輩方はきょとんとしてしまっています。

「山本、何言ってるんだ…？」

「先輩方、ドッキリお疲れ様です。神崎さん、ビックリしたでしょう？」

僕の考えた策、それはこの状況をドッキリ企画にしてみようこと。あとは先輩方が僕に合わせてくれれば…

「意味分かんねーよ」

はい、台なし。

「そのままお待ちください」

再び洞窟の外へ出る僕。

「君い、まだ中に入っちゃダメなのか？」

「まだダメです」

苛立つ捜索隊に構わず、僕は次の手を考えます。

そしてある結論に達しました。

「先輩達が僕の言葉に聞き耳を持ってくれないのなら、その姿勢に僕が合わせてしまえばいいんだ」

僕はまた洞窟へ。

「よせ、やめるんだお前達。僕の命令に従え」

洞窟へ戻った僕はみんなにこう言いました。 またもや先輩方はきよんとしてしまっています。

「今度はなんなんだ山本」と先輩。でも僕はそれを無視。

「早く逃げてください神崎さん。彼等は僕の創った“サイボーグ軍団”。崖から落ちた時のショックで暴走を初めてしまったのです。僕の言うことなんか聞きやしない」

サイボーグである先輩達が故障が原因で自分を襲ったんだと知ったら、神崎さんは訴えようだなんて思わないでしょう。さあ先輩達、ロボットみたいな動きをして僕の話を彼女に信じ込ませてください。

「ふざけんな！」

殴られました。

「まだ入っちゃダメなのか!？」

洞窟の外に出ると、捜索隊の方々が憤った様子で僕に尋ねました。

「まだです」

「いい加減にしてくれないか！ 一体何をしてるんだ！」

「そんな“悪魔”みたいな顔して怒らないでくださいよ」

その時、僕はまた新たな方法を思いつきました。

“神崎さんをこまかしつつ、先輩達に救助がきたことを知らせる

”という最高の方法を。これならみんな僕の芝居に付き合ってくれる。

僕は洞窟へ突入しました。

「神崎さん、先輩達は悪魔に取り憑かれています」

洞窟へ戻った僕はみんなにこう言いました。もう完全に先輩方はキレかけています。

「こう見えても僕はエクソシストの端くれ。先輩方を悪魔から解放するため、これから呪文を唱えます」

この呪文の意味に先輩達が気付き、“体から悪魔が抜けていく芝居”をしてくれば全て解決します。

「ソ〜サクタ〜イ・ガ・キタ〜ノ〜……ソ〜サクタ〜イ・ガ・キタ〜ノ〜……」

さあ先輩方、僕に合わせてください。そうすれば神崎さんは先輩達を訴えたりはしないでしょう。悪いのはあなた方ではなく、悪魔なんですから。

「ギエエエエエエエエ！」

洞窟内に響き渡る叫び声。その声を発しているのは先輩達……ではなく、神崎さん。

「おい山本、神崎に何をした!？」

「何を、と言われましても」

「酷いことを……」

「酷いのは先輩方でしょう。彼女を輪姦しようとしていた」

「違うぞ山本、俺達は突然暴れだした神崎を止めていただけだ」

その時、神崎さんの体から黒い何かが飛び出してきました。それはまるで……

「悪魔だああ!!」

漆黒の翼に立派な角、ええ間違いなく悪魔です。

悪魔は頭を抱え、呻き声を漏らしながらスッと消えていきました。どうやら僕の呪文は、神崎さんに取り憑いていた悪魔を追い払っ

てしまったようです。

「山本、お前本当にエクソシストだったんだな。悪魔を追っ払うなんて見直したぜ」

意外や意外、僕のことをパシリとして扱っていた先輩方が、次々と称賛や感謝の言葉を浴びせてきます。

「山本君、ありがとう。あたし悪魔に取り憑かれやすい体質なの」意識を取り戻した神崎さんも、僕に御礼を言ってきました。チャンスです。

「神崎さんさえよければ、僕が君の専属エクソシストになりますよ」

「六十年契約をお願いします」

神崎さんゲット。

先輩や神崎さんとの関係。過程は意外でしたが、僕の思い通りの結果となりました。

今日は最高の日です。

「あ、そうだ。みなさん、捜索隊の方達が来ています。僕達は帰れるんですよ」

「本当か！ よし、みんな行こうぜ！」

僕達は洞窟を出ました。

「……おらへんやん」

捜索隊は一人残らず消えていました。どうやら待たせ過ぎたせいで怒って帰ってしまったようです。

「シャアアアアア！」

「うわぁ！ また神崎が悪魔に憑かれた！ 山本頼む！」

やれやれ、僕らの遭難生活はまだまだ続きそうです。

エクソシスト山本―完―

(後書き)

> i 9 7 5 4 — 2 1 0 <

神崎さんは元から悪魔に憑かれてるような糞ドブスなのだが、サークルに女性は彼女だけなのでよくモテるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8192m/>

OH、遭難！

2011年11月15日07時40分発行